

子どもの発達段階に応じたセクシュアリティ教育実践に向けた
課題の検討
—日本と中国における『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』の影響に
着目して—

万馨翼（東京大学大学院），有間梨絵（東京大学大学院）

Examining Challenges Towards the Implementation of Sexuality
Education Practices According to Children's Developmental Stages:
Focusing on the Impact of the 'International Technical Guidance on Sexuality Education'
in Japan and China

Xinyi WAN and Rie ARIMA

Author's Note

Xinyi Wan is a MA student, Graduate School of Education, The University of Tokyo.

Rie Arima is a PhD student, Graduate School of Education, The University of Tokyo.

Abstract

This study explores the impact of the “International Technical Guidance on Sexuality Education” on the practice of sexuality education in Japan and China, highlighting the challenges faced in aligning educational practices with children’s developmental stages. Despite the Guidance’s emphasis on evidence-informed approaches to sexuality education, both countries face unique obstacles in its implementation. In Japan, traditional hesitance and societal resistance towards comprehensive sexuality education have hindered progress, while in China, efforts to adapt and localize the Guidance face challenges from cultural norms and educational policies. Through interviews with educators and practitioners in both countries, the study uncovers the discrepancies between the ideals proposed by the Guidance and the realities of sexuality education practices. The findings reveal a critical need for tailored approaches that consider cultural, social, and educational contexts to effectively integrate comprehensive sexuality education into national curriculums. The study proposes recommendations for overcoming these barriers, emphasizing the importance of community engagement, policy reform, and educator training in fostering environments conducive to the holistic sexual education of children and adolescents.

Keywords: Sexuality Education, International Technical Guidance on Sexuality Education, Comprehensive Sexuality Education (CSE)

キーワード：性教育，国際セクシュアリティ教育ガイダンス，包括的セクシュアリティ教育

子どもの発達段階に応じたセクシュアリティ教育実践に向けた課題の検討

—日本と中国における『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』の影響に着目して—

1 目的と方法

本研究の目的は、日本と中国における『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』がセクシュアリティ教育実践に与えた影響を検討することで、実践の深まりや広がりに向けた課題を考察することである。

『国際セクシュアリティ教育ガイダンス (International technical guidance on sexuality education: an evidence-informed approach)』(以下、ガイダンス) (2009 年, 2018 年改訂) とは、国連合同エイズ計画や国連人口基金、国連児童基金、世界保健機関の連携のもと、国連教育科学文化機関 (UNESCO) によって作成され、セクシュアリティ教育を実施する必要性とその教育効果をエビデンスとともに示した国際的な指針である。「ガイダンス」は、HIV/AIDS の感染をはじめとする健康課題や性のあり方、ジェンダー、人間関係をめぐる諸問題の解決に向けた教育指針であり、各国政府・省庁に対してはガイダンスを活用して先導的な措置をするように求めている。また「ガイダンス」は、5 歳から 18 歳までの子ども・若者を対象とし、発達段階ごとの学習課題とカリキュラムを具体的に提示している。カリキュラムを参考に、各地域の文脈に即して創造的にセクシュアリティ教育を展開していくことを求めている。

「ガイダンス」の発表を受けて、韓国、台湾、中国といった東アジアにおいては、各国で課題を抱えつつも、セクシュアリティ教育に向けた準備が進められているが、日本は大きな遅れをとっていることが指摘されている(田代, 2014)。

本研究は、網羅的な事項が提示されている「ガ

イダンス」に対して、日中の研究者・実践者が何を焦点的に受容しているのかを明らかにし、双方の特徴とセクシュアリティ教育実践に向けた具体的な課題を指摘したい。実践者が「ガイダンス」から何を受容し、それが全体としてどのような特徴を帯びているのか、その具体的な議論の様相は何か、実践者へのインタビューと日中の比較検討という視角から、セクシュアリティ教育実践の課題と実践に向けて突破口となる新たな視角の可能性を追求したい。

研究方法としては、主にインタビューである。インタビューは機縁法によって研究協力者を得た。研究協力者のプロフィールは以下の表の通りである。

表 1 研究協力者のプロフィール

氏名(仮名)	研究者/実践者	国籍
陳詩漫先生	研究者・実践者 (大学教授)	中国
劉羽さん	実践者(社会人・ ソーシャルワーカー)	中国
酒田真奈美先生	実践者 (高校教員)	日本
下田愛子先生	実践者 (元養護教諭)	日本

2023 年 8 月～2024 年 3 月にかけて、陳詩漫先生、劉羽さん、酒田真奈美先生、下田愛子先生(全員仮名)の 4 人に、半構造化インタビューを実施した。1 回につき 1～2 時間であり、陳詩漫先生、劉羽さんは対面で実施し、酒田真奈美先生、下田愛子先生はオンラインで実施した。

対面では IC レコーダーの録音，オンラインではミーティングツールの録音機能を使用した。

また，インタビュー開始前に東京大学ライフサイエンス委員会倫理審査専門委員会の承認を受けた（承認番号：23-495）。インタビュー実施時には，研究協力者に研究目的や研究協力への同意，同意撤回の手続きについて説明し，同意を得た上で実施した。またインタビューは，研究協力者に事前に共有したインタビューガイドを参考にして行った。インタビューガイドは，主に①セクシュアリティ教育実践の取り組みについて，②『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』の認識について，③セクシュアリティ教育の課題について，の3項目から構成されている。インタビューはインタビューガイドの全ての項目を質問したわけではなく，研究協力者との相互作用の中で進められた。

分析手順は，まず音声データを文字に起こした。次に，①性教育についての認識や実践の状況，②実践に対する「ガイダンス」の影響，の2つの視点から，インタビューをテーマ的に整理しながら叙述した。

2 セクシュアリティ教育

2.1 セクシュアリティ教育ガイダンス

「ガイダンス」は7章で構成されている。第1～2章では「ガイダンス」の基本紹介と包括的セクシュアリティ教育の定義が記述されている。第3～4章では子ども・若者の性と生殖におけるニーズや課題についての概要や，更新された科学的根拠と共に提示されている。第5章では具体的なキーコンセプトやトピックが年齢ごとの学習目標と共に述べられている。第6～7章では，包括的セクシュアリティ教育実施のためのサポート体制の構築方法や，効果的な

プログラムを実施するためのプロセスが示されている。「ガイダンス」には，8つのキーコンセプト（① Relationships, ② Values, Rights, Culture and Sexuality, ③ Understanding Gender, ④ Violence and Staying Safe, ⑤ Skills for Health and Well-being, ⑥ The Human Body and Development, ⑦ Sexuality and Sexual Behaviour, ⑧ Sexual and Reproductive Health）が示されている。また，内容項目と学習目標は4つの年齢グループとそれに対応したレベル（① 5～8歳レベル1, ② 9～12歳レベル2, ③ 12～15歳レベル3, ④ 15～18歳レベル4）が設定されている。ガイダンスは，学校教育におけるセクシュアリティ教育のためのプログラムや教材や計画・実践を支援するために開発されている。さらに，学校関係者を含むスタッフや，非政府組織（NGO）や若者をサポートする人々，若者もまた，主張あるいは説明ツールとしてこのガイダンスを使うことも可能になる。「ガイダンス」は，世界中の異なる地域の専門家と実践家たちからの意見を取り入れ，国際的なレベルでの高い質と受容性，主体性を確保するためにデザインされたプロセスの中で開発されたものであるが，自主的なもので強制されるものではなく，国際的な科学的根拠や実践に基づいており，セクシュアリティ教育が実施されているそれぞれの国・各地域の状況の多様性を認めている（UNESCO, 2018）。

2.2 包括的セクシュアリティ教育

包括的セクシュアリティ教育は，英語で「Comprehensive Sexuality Education (CSE)」という。「ガイダンス」により，以下の定義がある。

包括的セクシュアリティ教育（CSE）は

セクシュアリティの認知的、感情的、身体的、社会的諸側面についての、カリキュラムをベースにした教育と学習のプロセスである。それは、子どもや若者たちに、次のようなことをエンパワーメントしうる知識やスキル、態度や価値観を身につけさせることを目的としている。それは、かれらの健康とウェルビーイング（幸福）、尊厳を実現することであり、尊重された社会的、性的関係を育てることであり、かれらの選択が、自分自身と他者のウェルビーイング（幸福）にどのように影響するのかを考慮することであり、そして、かれらの生涯を通じて、かれらの権利を守ることを理解し励ますことである。

上記の内容から、つまり、包括的セクシュアリティ教育は、性と生殖の健康に関する幅広いトピックをカバーする教育の形態で、正確で科学的根拠に基づいた情報を各年齢層に適した形で提供しているが、これらに限定されていない。性と生殖に関する生理学、避妊、妊娠と出産、HIV や AIDS を含む性感染症などのトピックが含まれているが、性的虐待やジェンダー平等、反差別、性的行動、同意と身体の自己決定権など、一部の社会的および文化的文脈では扱いにくいとされるトピックも含めることで、すべての学習者に知っておくべき重要なトピックの全範囲を提供している（UNESCO, 2018）。

2.3 日本に関する議論

包括的セクシュアリティ教育は国際的に提唱されている概念である一方で、日本の性教育はこれまで多くが禁欲主義（abstinence only）に基づいていた（関口, 2023）。関口（2023）による

と、日本の性教育は「限定的」および「排他的」な側面を持つと指摘している。「限定的」とは、現行の学習指導要領に性交等の取り扱いが制限されており、小学校から高校までの教育カリキュラムでは性交、恋愛、人間関係に関する内容が教育の範囲外とされていることを意味する。「排他的」とは、文部科学省と学習指導要領が人間の性を異性愛に限定し、「子どもを産んで育てるための性」のみを取り扱い、性の多様性や性的コミュニケーション、性的侵害・性の暴力などを除外している状況を指している。

一方、このような背景の中に、近年日本では、性的マイノリティや性の多様性についての理解の必要性に向けて、学校教育で当事者団体による出張授業や教員研修などが行われるようになってきている。東京オリンピックに向けて人権教育を推進しようとする社会的背景や国際的な当事者の社会運動の気運が高まったのことも一部に原因と推測できる。小中学校や高等学校で使用されている教科書は、性の多様性について取り上げている。現行の学習指導要領では性の多様性に関する記述が認められないものの、子どもにとっては身近な教科書において、性の多様性への言及が見られるようになった。また、改訂された小学校教科書で「LGBT」の記載が増えるという報道があり、小学校体育科保健領域の教科書では、この改訂によって、たくさんの出版社が性の多様性について取り上げることとなり、性の多様性が学校教育でも注目されていることがわかる（永田, 2023）。

しかしながら、日本の学校性教育は UNESCO の推奨する包括的性教育と大きく乖離しており（林・石川ら, 2022）、性教育の方針は明示されているものの、具体的な内容の決定は各学校や教員に委ねられている（橋本ほか, 2011）と指

摘されている。また、日本の若者の性の現状から見ると、日本の年間人工妊娠中絶件数が12万件以上で、そのうち10代の件数が9000件以上であり(厚生労働省, 2023), 若者の梅毒などの性感染症が急増(国立感染症研究所, 2024), さらに、科学的根拠のない「寝た子を起こすな」論が学習指導要領に影響を与えており「はじめ規定」の存在が学校の性教育の問題点として指摘されている(良, 2019; 橋本, 2020; 浅野, 2020)。また、日本におけるセクシュアリティ教育では、HIVや性感染症(STD)の予防知識が不十分であることが若者の感染不安を高めており(木原, 2000), 中学校の学習指導要領に性交や避妊に関する教育が含まれていないため、性教育の指導内容に矛盾が生じている(土田・キム, 2022)。さらに、七生養護学校事件を典型例としてあげる性教育バッシングにより、性教育は大きな批判に直面している。これが原因で、日本の性教育は大幅に後退している(包括的性教育推進法の制定をめざすネットワーク, 2023)。

2.4 中国に関する議論

中国では2000年以降、特にHIV・AIDSの予防教育に注目が集まっている(Liu, Yuan, 2017)。2009年、「ガイドンス」と国際地域の性教育関連資料に伴い、国際社会における性教育は重要な位置に置かれるようになった。2007年には、「ガイドンス」を現地化し、中国の文化に沿った教材を出版することで、性教育の充実を図っている(橋本ら, 2018)。2007年から出版された『珍愛生命(いのちを大切に)』(北京師範大学出版)は、小学生向けの性健康教育の教科書であり、その内容は、中国の法律・法規で定めた内容と合致しているほか、国際的な性教育に関連

する様々な資料(主に「ガイドンス」)をも参考にして編成している。学年・発達段階に応じ、教科書内容の深さと広さが順を追って一步步進んでいる(橋本ら, 2018)。さらに、この教科書は生理衛生教育・性心理教育・道徳教育を含む、総合的な指導法を取り入れる性教育の必要性も強調された。例えば、人権を尊重する視点から、文字と図表等を併用しつつ、科学的な手法を用いて性生理の知識を説明し、生徒・児童の発達段階ごとに自己同一性・アイデンティティを探索することを目的とし、そして性的生理と性的心理に限らず、性的侵害や暴力やいじめ等を防ぐため、男女平等、価値観の判断、性の多様性などの意識を身に付けることや、生徒・児童の自己保護なども網羅されている。すなわち、中国で最も体系的・系統的な性教育教科書と言える。

したがって、2011年、中国国務院による『中国児童発展綱要(2011~2020)』では、性教育は義務教育として行われる性と生殖健康教育を目標とすべきであるとの方向づけをしている。また、2012年、中国性学会による『青少年性健康教育指導綱要』では、「性の権利」「人権」という視点からの性教育の在り方について示しており、小学校から高校までを教育の対象としていた。この中でも、小学校1年から小学校6年までを対象とする児童・生徒に対し、年齢ごとの発達特性等を十分に考慮した上での教育内容の工夫など、段階的な内容の編纂が求められていた。すなわち、性に関する人間関係及び性に関するコミュニケーションと判断も、性教育の不可欠な部分であると指摘している。その時期、マイルストーンになったのは、2020年6月に改正された「中華人民共和国未成年者保護法」により、初めて「性教育」という言葉が法律の条

文の中で明記されるようになった。この法律により、幼稚園を含めて、全ての学校教育の中で、それぞれの年齢・発達段階に応じて、適応的な性教育を行う必要があると規定された。また、未成年者がセクシャル・ハラスメントや性的侵害を防ぐため、自己保護の意識と能力を身につけることも必要だと言及した。

しかし、中国におけるセクシュアリティ教育では、実際の教育現場には、子どもの発達段階に応じた性の多様性や人権教育の内容が欠けていることが問題視されている（田代・康，2021）。また、包括的セクシュアリティ教育の教科書の出版と教育現場の実践に対する SNS などの批判もあり（郭，2022）、さらに、性教育が性別の理解や性別を横断する内容に不足しており、一部の教育プログラムでは人間関係や価値観に関する指導が適切でないとの指摘がある（Li et al., 2022）。

3 インタビューの分析

3.1 陳詩漫先生の語り

まずは陳詩漫先生の語りを検討する。陳詩漫先生は師範大学の子どもの心理学分野の教授である。主な研究テーマは、子どもの性的虐待のリスク認知に関するものである。2015 年頃から子どもの性的侵害に関する心理学的な実践を始め、現在も都市と農村で性的侵害の予防に関する講座を開催している。都市や農村では、子ども向けの講座・保護者向けの講座・教員向けの研修講座など、民間や学校や政府の要望のもとで、講演スピーカーなどとして、幅広く活動している。

・性的虐待の深刻性と包括的性教育の必要性

陳先生は、性的虐待が深刻な問題であるとして、即時の対策を訴えている。特に、「社会から

取り残されがちな若者たち」が高いリスクにさらされていることを懸念しており、「これまでの研究は、性的虐待のリスクを単なる数字や事実として捉えがちだが、子どもたちの感情や考えが見過ごされている」と指摘している。この視点の欠如は、対策の実効性を低下させている。さらに、陳先生は「子どもたちを性的虐待から守る最も効果的な手段は包括的な性教育である」と主張し、中国における性教育の遅れを語っている。性教育の不足と文化的な障壁が問題解決の大きな妨げであるとし、「性に関する話題に対するタブーが、教育の進展を阻害している」と述べている。

・性教育実施の難しさと経済的に恵まれない子どもへの支援

中国の学校における性教育の不十分さを指摘した陳先生は、その実施に対する文化的な壁や保護者の反対などの困難を強調している。特に、『珍愛生命（いのちを大切に）』という教科書に対する反響は、性教育に関する社会的議論と文化的な壁を浮き彫りにしたと述べている。「中国では多様な意見や文化的な壁により、性教育の推進が困難である」とし、特に保護が必要な子どもたちに対する教育の必要性を訴えている。陳先生は特に、農村や経済的に厳しい地域、流動児童に焦点を当て、「具体的なデータが乏しいため、報道を頼りにするしかない」と述べつつ、これらの子どもたちが直面する高いリスクを指摘している。親の不在や適切な教育の欠如が、これらの子どもたちを特に脆弱にしており、「子ども自身が何をすべきか、何が起きているのかを理解できていない。農村地域では、子どもの性的な権利に対する認識が低いのが普通だし、それを教える教育も足りてないから、問題が多い」と強調し、保護と支援の重要

性を訴えている。

・「ガイダンス」と現実のズレ

陳先生は「ガイダンス」の理念を支持しつつ、中国の教育現場における性教育の実施に関する問題点を指摘している。「ガイダンス」では、子どもの年齢に応じて徐々に性教育を進めることの重要性が強調されており、「生理衛生だけでなく、心の健康や人間関係の構築も大切だ」と陳先生は述べている。しかし、実際の教育現場では性教育が形式的に行われがちであり、主に生物学の授業で性の生理的側面だけが教えられ、HIV 予防に限定されることが多いと彼は批判している。「講演がなければ、学校の性教育は形式的なものになってしまう」と指摘して、また、性教育を深く学ぶ機会が少なく、「授業時間はほとんど宿題や自由時間に充てられている」とも述べている。さらに、陳先生は性的マイノリティの子どもたちへのケアとサポートが不足している現状についても言及している。「彼らは偏見に直面しながらも、その状況を受け入れて生活を続けているというのが現実だ」と述べ、これらの子どもたちに対する理解と支援の必要性を強調している。

陳先生のインタビューは、中国の性教育への深い理解と、この問題に対する包括的な対策の必要性を強調している。特に、文化的な障壁と性教育の不足が根底にあると指摘し、また中国の農村や経済的に恵まれない子どもたちへの支援の重要性も強調している。

3.2 劉羽さんの語り

劉さんは現代社会における一般社会人かつソーシャルワーカーとしての立場から、修士課程における学術研究プロジェクトを通じて得た洞察を共有している。このプロジェクトは、社

会学の指導教員の指導のもと、2021年から2022年にかけて、地方から都市部へ移住したコミュニティの文脈で展開された。研究の内容は、子どもの性的虐待を防止するための親の教育に着目したソーシャルワークの介入であり、具体的には性教育の実施方法およびその社会的課題を探求している。

・性教育の必要性和実施上の課題

劉さんは、性教育の必要性に関して、中国での法改正や社会的な認識の変化を背景に語っている。特に、「中華人民共和国未成年者保護法」の2020年の施行は、社会における性教育への関心を高めたが、教育方法や法律整備の面で課題が多いことを指摘している。劉さんは、「性教育の具体的な方法やルールの定め方に関して、まだ十分な取り組みがなされていない」と述べ、社会全体のアプローチに改善の余地があると考えている。

・「ガイダンス」と実践のギャップ

さらに、劉さんは「ガイダンス」の概念を基に実践を展開した経験を踏まえ、「コミュニティの小学校での性教育は、学級会や講義を中心に行われているが、基本的に生理的な知識に限定され、性的リスクの予防に特化したカリキュラムは存在しない」と述べる。これは教育現場における性教育の限界を浮き彫りにするものであり、資源の不足と専門教員の欠如を根本的な問題として挙げている。

さらに、性教育に関して、保護者が学校に頼りがちであるものの、学校は生徒の学業に重点を置いており、性的暴力や虐待や侵害などの予防教育が十分に行われていないと述べる。また、劉さんは、親やコミュニティの役割に関しても考察している。「多くの中国の親たちは、どう教えたら良いのか分からず、家庭での性教

育を十分に行っていない」と指摘し、これにより、性教育の責任が学校に一方的に委ねられがちであると述べている。さらに、親が性教育における自身の役割を認識し、適切な教育を提供することの重要性を強調している。

・性教育の実践の限界

劉さんは、性教育実践の限界についても触れている。「中国には性教育のためのしっかりとしたガイドラインや専門的な教え方が欠けている」と指摘し、これがソーシャルワーカーの介入における課題の一つであるとしている。「私たちからの質問に対して、即座に正確な答えを提供することの難しさは、ソーシャルワーカーの知識やアプローチへの信頼性を低下させる要因になっている」と述べ、性教育における専門性の向上と社会的支援の拡充が必要であると結論付けている。

以上の分析は、劉さんの洞察を基に、中国における性教育の現状、課題、およびその実践と限界についての深い理解を示している。劉さんの研究は、性教育に関する社会的課題に対する実践的な解決策の模索を通じて、親や教育者、コミュニティが直面する問題に対処するための貴重な洞察を提供している。

3.3 酒田真奈美先生の語り

酒田真奈美先生は、高校の保健体育科の教員として勤務している。勤務校が性教育に独自のカリキュラムを有し、1年間を通して性教育を実施することができる。酒田先生は、勤務して6年目、性教育を担当して4年目の教員である。元々、体育より保健の分野に関心を強く持っており、「面白いな」と思って性教育の授業を担当するようになった。また職場でジェンダー平等について疑問を抱くことがあり、生徒とジェン

ダーについて対話したいと思うきっかけとなった。

・「ガイドンス」の前後における実践の変化

酒田先生は、性教育実践を始めて4年目であり、「ガイドンス」発表前に性教育を行っていたわけではない。だが、学校は「ガイドンス」発表前から、性教育のカリキュラムを有しており、そこで参照する100ページほどの「資料集」が作成されていた。その資料集は、随時改変されていたが、「ガイドンス」の発表を受けて「ガイドンス」を基に資料集の内容が見直されて、その後はほとんど改変されなくなったという。現在も更新されているのはグラフをはじめとするデータであるという。

・「ガイドンス」と自らの実践の内容との関連

酒田先生は教えたいと思う内容が「ガイドンス」に寄ってきていることを実感している。「これやったらこれ教えなきゃいけないな」という項目が性教育実践をしながらどんどん繋がっていく。「ガイドンス」を参考にして性教育を構成する側面もあるが、1年間を通して性教育実践を進めていく中でほとんど必然的に「ガイドンス」の内容に接続していくという。教員は、セクシュアリティ教育についての研修会や勉強会が準備されているのではなく、各自が資料集や読書をしたりして実践をしながら学んでいるという。また教員同士の日常的な会話において、性について語り合うことがある。同じ本を読んでも社会科や国語科、保健体育科などそれぞれの専門性から捉える視点が異なるため、教員同士で語り合うだけでも性教育の引き出しが増えるという。また学校の図書館には性教育に関する書籍も多く、教員や生徒が自ら学ぶ環境は整っている。

・性教育実践の内容

学校の中では社会科の先生が自らの専門性に引きつけてテーマを取り上げたり、女性の先生がHPVワクチンについて語っていたりして、担当者によって個性があり、生殖機能や性交にこだわらずに「関係性」や「ジェンダー」を重視するケースが多いという。また学校の性教育は総合の時間でカリキュラムが設定されており、「科学的根拠」を重視すると「教え込み」になってしまうという懸念もあるという。ただし「知らなきゃそういう選択肢は選べないよね」という観点で、データを用いた説明や中絶についての知識や議論を行うという。

・セクシュアリティ教育への期待

酒田先生はセクシュアリティ教育において、様々な価値観や捉え方があるという認識形成が重要であると考えている。生徒は、高校に入学して、すでに自らの固定観念や偏見を保有しているところで初めてセクシュアリティ教育と出会う。生徒に知る機会を与えることは重要であるが、「これを知っていなければならない」「こうあるべき」という枠組みを提示してもこぼれてしまう。例えば、酒田先生は、性感染症や避妊、中絶についても生徒が知らないことを恥じたり引け目を感じたりしないような提示の仕方を求めている。したがって「1年間通じて、本当いろんな考え方の人がいるよねとか、何かそういうお互いが考えていることを共有しながら、何か自分がどれを選んでいくかって、何かその子が最終的に選択できるための何か準備の時間になる」と考えている。教科書通りの解答を導くのではなく、セクシュアリティ教育のテーマを深めていく中で自らの思い込みに気づくことを願っている。

以上、酒田先生の語りを叙述してきた。酒田

先生は「ガイドンス」の発表後からセクシュアリティ教育実践に取り組みはじめた。「ガイドンス」の影響は、授業を構成する際の参考となる学校の「資料集」に顕在していた。資料集はそれまでの内容が「ガイドンス」を基に見直されて、ほとんど確定版として定着した。また酒田先生は実践を進めるなかで、生徒に科学的に知識を学習させること、自らの偏見に気づかせ多様な価値観や捉え方を学習させること、「総合」というカリキュラムの位置付けに葛藤があったことを指摘した。

3.4 下田愛子先生の語り

下田愛子先生は、公立の小・中学校で養護教諭として40年間勤務し、現在は退職している。退職後は自宅で保健室を開いて地域の人たちの相談活動や保健教育を行っている。性教育に関しては、40年ほど前から地域のサークル活動の中で実践を探究してきた。現在も性教育の民間教育研究団体に所属し、新たな理論や実践を学び続けている。また現在は、「キャラバン隊」を結成して学校に出向いて性教育を実施したり、市民講座のような形式で性教育に取り組んだりしている。キャラバン隊は、約10年前にある高校から学校の中でセックスをした生徒がいて性教育が問題化し、相談を受けたことから始まった活動である。それ以来、学校から依頼を受けて、サークルのメンバーで分担しながら性教育を実施している。2023年度のキャラバン隊の活動は、様々な場所での講義や授業などを含めて、200件以上にのぼる。

・「ガイドンス」発表後の性教育実践の変容

「ガイドンス」が発表される以前は「月経指導」が中心であった。それも排卵を教えずに月経の仕組みを説明していた。また女性の性のみを扱

い、生き方や関係性を含むものではなく、男性の性は対象外であった。男性の性については、射精があるということで性交のところは教えていなかったが、子どもたちからの疑問に答えようというように変化している。また性同一性障害などセクシュアリティに関する授業は「マイノリティの人がね、どういうところで困っているかっていうところ」に焦点を当てて展開してきたという。しかし「ガイダンス」を受けて困りごとに焦点を当ててマイノリティを区分した視点ではなく「これは分けるんじゃないって、もう性は多様なんだっていうところは、やっぱり1人1人が、男と女だけに分けるんじゃないってことがわかる人は自分らしく生きられるよね」という切り口で実践が構成されるように変化したという。

下田先生の語りから、「ガイダンス」が性教育実践の指針となり、実践の内容を問い直す契機となっていることがわかる。学校に呼ばれて性教育を実施する「キャラバン隊」の活動では、それぞれ単発の実践であり、テーマは学校から指定されている。そのテーマに基づく性教育実践では、「ガイダンス」の8つのキーコンセプトのうち3つほどしか入れることができない。ジェンダーの理解や暴力、安全確保などは実施する可能性がある一方で、特に、関係性や価値観、権利、文化、健康と幸福のためのスキルなどについて、触れることができていないということを下田先生ははっきりと認識することができたという。下田先生は「ガイダンス」で提示された項目を見て「こういうのをしっかり入れていこうよ」というように、実践創造の指針としている。またガイダンスを参考にして「この資料の方がもっと考えるよ」「アンケートはこっちを取った方が子どもにいいよ」「このクイズ

入れようよ」などの議論に繋がっているという。

・「ガイダンス」の項目と性教育のニーズの関係

学校から依頼されて性教育を実施する「キャラバン隊」の実践は、学校の児童生徒の実態を基に「ガイダンス」を参照して、テーマや内容を選定していくという。最初に学校からテーマの指定があっても必ず児童生徒の実態やこれまでの性教育の経験を踏まえて、実践の内容を決めていく。実態から見えてくるセクシュアリティの課題から「これはねジェンダーの理解が一番必要かなとか、これは関係性だよ」とテーマを検討し、学校には事前指導・事後指導についての依頼も提示する。

依頼の多いテーマは、例えば学校内で性交をしている生徒がいた、身体をベタベタと触ってくるなど、その学校で喫緊の課題となった出来事に由来する。また交際パートナー間でのDVや性の多様性についての依頼も多いという。また日本社会の性被害・性加害の事件報道などにも影響を受けて、DVに関する依頼が増えている傾向も指摘する。

・対象の年代と内容の包括性に「ガイダンス」の意義を認識する

下田先生は「ガイダンス」の意義を「とにかく生まれたときから、死ぬまでが、性の学びっていうことが一番だと思う」と語る。幼稚園の頃から、小学校、中学、高校、社会人になってからも「年代に合わせながら繰り返しやっていく」という包括性が「ガイダンス」の特徴である。また「8つのキーコンセプト」に基づいて、人権や幸福感を重視して学習していくところが「ガイダンス」の最も重要なところであると考える。

以上、下田先生の語りを叙述してきた。下田先生は約40年間性教育に取り組んできた実践

者である。現在も性に関わる民間教育研究団体に所属して、性教育の理論と方法を学び続けている。「ガイドンス」の発表後は、その8つのキーコンセプトを参考にして実践を構成している。単発的な講義の限界や、依頼されるテーマに偏りがあることの課題を指摘した。

4 全体考察

以上、セクシュアリティ教育に関する4名の研究者・実践者の語りを、性教育実践の捉え方と「ガイドンス」の影響という視点から整理してきた。まず、4名ともセクシュアリティ教育の必要性とその意義を認識しているが、実践を深め拡げることについては不十分であり課題があることを指摘している。次に、4人とも「ガイドンス」の有効性を支持し、「ガイドンス」に基づいたセクシュアリティ教育が展開されることを願っている。しかし、「ガイドンス」に基づくセクシュアリティ教育実践が十分に実施されていない現状を指摘している。特に、今後のセクシュアリティ教育実践では、「ガイドンス」が提示する「心の健康」や「人間関係」などのテーマを取り上げ、深めていく必要性を語っている。

中国におけるセクシュアリティ教育の展開は、伝統的に衛生教育を中心に据えたアプローチを採ってきたが、近年、人権教育の側面を取り入れる動きが見られる一方で、その実施は依然として困難に直面している。具体的には、学校教育における包括的性教育の実例は限られており、長らく教育内容は生理学や衛生学に重点を置いた限定的な範囲に留まっていた。この背景には、性に関する教育がタブー視され、社会的な偏見や誤解に基づく慎重な扱いが求められる文化的な要因が存在している。しかし、時代の変遷と共に、性教育に対する社会的な認識は

徐々に広がり、安全な人間関係を構築し、性的な健康を促進するための教育へとその焦点が移行してきた。この変化は、性教育の重要性とその教育範囲の拡大を示唆していると同時に、教育現場における課題をも浮き彫りにしている。これらの課題には、性教育に関する具体的なガイドラインの欠如、教育カリキュラムが依然として生理学と衛生学の知識に偏重していること、そして、性的多様性や虐待の予防といった重要なトピックがカバーされていないが含まれている。

日本においては、「ガイドンス」公表以前の状態は比較的流動的であり、教育者は手探りでの実践を余儀なくされていた。「ガイドンス」の導入は、性教育実践において重要な転換点となった。この「ガイドンス」の公表以降、性教育の実践はより系統的なものとなり、カリキュラムの固定化に寄与した。実践者たちは、人間関係や多様性の観点を重視すると同時に、性を肯定的に捉え、性教育を人権の観点からアプローチすることの重要性を認識している。一方、「ガイドンス」は性教育を実施する上での指針となり、性の健康を促進し、性に関する様々な側面を肯定的に捉えることの重要性を強調しているが、日本では避妊や感染症予防に対して不足している。しかし、多様性や人権、人間関係に焦点を当てた教育が推進されている。このようなアプローチは、個人の尊厳、自尊心、そして社会的な共生の能力を育むための重要な手段であることを認識している。

参考文献

- ・浅井春夫ら・遠藤まめた・染矢明日香・田代美江子・松岡宗嗣・水野哲夫(編著)(2023). 『Q&A 多様な性・トランスジェンダー・包

- 括的性教育——バッシングに立ちむかう
74 問』大月書店
- ・浅野春夫 (2020). 『包括的性教育——人権、性の多様性, ジェンダー平等を柱に』大月書店
 - ・郭立夫 (2022). 「中国における性教育の制度と実践」, 季刊セクシュアリティ No.106, 80-87
 - ・橋本紀子 (2020). 「性と性教育をめぐるわが国の現状と課題」『保健の科学』, 62 (4), 220-224
 - ・橋本紀子・篠原久枝・田代美江子・鈴木幸子・広瀬裕子・池谷壽夫・長香織・小宮明彦・渡部真奈美・茂木輝順・森岡真梨 (2011). 「日本の中学校における性教育の現状と課題」『教育学研究室紀要:「教育とジェンダー」研究』, 9, 3-20
 - ・橋本紀子・池谷壽夫・田代美江子 (2018). 『教科書にみる世界の性教育』かもがわ出版
 - ・林雄亮・石川由香里・加藤秀一(編集) (2022). 『若者の性の現在地 青少年の性行動全国調査と複合的アプローチから考える』勁草書房
 - ・包括的性教育推進法の制定をめざすネットワーク (編) 浅井春夫・日暮かをる (監修) (2023). 『なぜ学校で性教育ができなくなったのか 七生養護学校事件と今』あけび書房
 - ・木原正博 (2000). 「日本人の HIV/STD 関連知識, 性行動, 性意識についての全国調査」『平成 11 年度厚生科学研究費補助金エイズ対策研究事業 HIV 感染症の疫学研究報告書』
 - ・国立感染症研究所「日本の梅毒症例の動向について」2024 年
 - ・厚生労働省「令和 4 年度 衛生行政報告例」2023 年
 - ・Li H., Yang H., Luo Y., Wu J., Liu Z., Cai Y., Shao Y., Xie L., & Gao Y. (2022). Current status and considerations of sexuality education in primary and secondary school[J]. *Chinese Journal of School Health*, 43(7), 965-969
 - ・劉文利「1988～2007 年: 我国青少年性教育研究綜述」『中国青年研究』, 2008 年 3 月
 - ・劉文利「中国青少年性教育の歴史回顧と発展 サマライズ」『中国青年研究』, 2008 年 12 月
 - ・Liu W.L. (2008). 1988-2007: Review of Sex Education for Chinese Youth. *China Youth Study*, 2008(12), 50-57
 - ・Liu W.L., & Yuan Y. (2017). Review of Sex Education Policy in Primary and Secondary Schools in China (1984～2016). *Education and Teaching Research*. 2017(07), 44-55.
 - ・水野哲夫 (2022). 「日本における包括的性教育の現状と課題」, 季刊セクシュアリティ No.107, 34-43
 - ・永田麻詠 (2023). 「学校教育をクィアにひらかれた場所に—「ふつう」を問いなおす資質・能力を育てる教育をめざして—」日本子どもを守る会編『子ども白書 2023』かもがわ出版
 - ・関口久志 (2023). 「Q1 包括的性教育の『包括的』とはどういうことですか。普通の性教育とは違うのですか?」浅井春夫ら (編著)『Q&A 多様な性・トランスジェンダー・包括的性教育——バッシングに立ちむかう 74 問』大月書店
 - ・田代美江子 (2014). 「東アジアにおける性教育の制度的基盤—韓国・台湾・中国と日本

- 一」『JASE 現代性教育研究ジャーナル』日本性教育協会, 2014 年 3 月 15 日, No.36
- ・田代美代子・康懌婷 (2021). 「北京師範大学 児童性教育プログラム開発グループの取り組み」季刊セクシュアリティ, No.102, 2021 年, p.172-175
 - ・土田陽子・キムハリム (2022). 「学校で包括的性教育を行う必要性とその課題 NPO 団体に対する学校性教育についてのインタビュー調査から」林雄亮・石川由香里・加藤秀一 (編)『若者の性の現在地 青少年の性行動全国調査と複合的アプローチから考える』勁草書房
 - ・UNESCO, 2018, International technical guidance on sexuality education: An evidence-informed approach (Revised edition), UNESCO (編) 浅井春夫・長香織・田代美江子・福田和子・渡辺大輔訳 (2020). 『改訂版国際セクシュアリティ教育ガイダンス 科学的根拠に基づいたアプローチ』明石書店
 - ・長香織 (2019). 「人権教育としての性教育を实践して」『部落解放』, 772, 41-49